

ふもとくしな野
筆道資料の探訪

国産墨と芸州筆

広島藩は財政難を切り抜けるため、文政年間の事業として「工芸の奨励」により国産増産を積極的にすすめました。

その事業の一環として文政十三年（一八三四）沼田郡新庄村（広島市西区三滝町）に藩営の製墨場を設置しました。

新庄墨の製法技術は奈良墨を導入したもので、製墨師は奈良から招いた中川半次郎とその子

庫次郎ほか弟子十一人でした。

天保二年（一八三一）安芸郡熊野村の墨屋長兵衛が国産の新庄墨売捌取次の筆頭に選ばれています。

そして同六年には長兵衛改め住屋貞右衛門は御褒美として銀八〇匁を藩から賜っています。

また広島藩は貞右衛門に対し「右製墨方御手始メ之頃より売捌方之儀専引受甲斐々々敷立働

年来不怠出精候ニ付」として熊野村与頭同格の格式を与えました。

国産の毛筆を作る事業は「工芸の奨励」による藩の殖産興業政策として当然のなりゆきでした。芸州筆製産の内旨を受けた貞右衛門は庄屋千兵衛と相談の上、毛筆技術の習得生として摂津有馬に佐々木為次（毛筆元祖）熊野町史通史編六九五頁参照）を派遣したものと考えられます。

弘化三年ごろに浅野藩御用筆司に付いて筆の作り方を習得した井上治平と同じく有馬から製筆法を学んだ音丸常太が前後して帰村し、その技術を村民に伝えここに芸州筆製産が安芸郡熊

野村に始まったのです。



承和使本右の御書
者一程承和御書
丁基也



なりたか
広島藩10代藩主 浅野斉藤公御書